東 瑞穂
HIGASHI Mizuho

狩野山雪「瀟湘八景図屏風」と「花卉流水図屏風」
—主題と典拠について—

Eight Views of Xiao Xiang and Stream and Flowering Plants by Kano Sansetsu: Subject and Source

美術史領域

はじめに

本論では、狩野山雪筆「瀟湘八景図屏風」と「花卉流水図屏風」（東京国立博物館蔵）の主題と典拠について再考することを目的とする。

狩野山雪（1590–1651）は 17 世紀京都を中心に活動した狩野派の絵師である。

本図の制作年代は 17 世紀前半とされ、折りたたんだ際に内側になる「瀟湘八景図屏風」が表側、外側にくる「花卉流水図屏風」が裏側として構成されている。

表側にあたる「瀟湘八景図屏風」（図 1）は各扇一図ずつで全 8 図からなり、各図縦 54.9cm× 横 37.2cm、右から山市晴嵐、江天暮雪、平沙落雁、遠浦帰帆、漁村夕照、煙寺晩鐘、洞庭秋月、瀟湘夜雨の順に配されている。

裏面の「花卉流水図屏風」（図 2）は各扇縦 87.1cm× 横 46.7cm で、上半分に流水図、下半分に花卉図が配されている。上半分には湧き上がる水が円弧状に波紋をつくり、所々には水草が浮いている。下半分の花卉図は 288 区画に分けられており、一扇あたりは 6 列 6 段の計 36 区画から構成されており、そのうち 144 区画には様々な種類の四季の草花や花木、果実などが描かれている。各区内はさらに緑青や茶などの色枠線で枠取られ、青金箔の方にはツバキやキクといった様々な種類の花と果実が描かれている。

本論では主に表面「瀟湘八景図」について言及し、様式が異なる点について明らかにする。さらに、裏面「花卉流水図屏風」では既に明らかとなっている種を踏まえ、未だ品種が明確にされていない花卉も含めた全 120 種の特定を行う。また、表裏で構成された本図がどのような寓意を含んでいるのかについて、裏面「花卉流水図屏風」が司馬光の独楽園を表現しているという先行研究と「瀟湘八景図」が宋迪によって創始されたという点を踏まえ、本図が制作される背景に熙寧元年（1068）から元豊元年（1078）における司馬光、蘇軾、宋迪 3 人の交流とそれを記録するテキストが関係し、さらにそれらが表面「瀟湘八景図」が異なる様式を用いて制作されることに繋がったのではないかと仮説を立てて考察を進めた。

第 1 章　「瀟湘八景図屏風」について

第 1 章では、瀟湘八景図の成立と日本への流入、及び受容についてについて概説するとともに、山雪の「瀟湘八景図屏風」各扇の様式に関わる考察とその順序、及び連歌との関係についてまとめた。

瀟湘とは長江中流にある洞庭湖とそこへ流れ込む湘江と瀟水、そしてそれらを取り巻く山々を含む湖南省長沙一帯の地域である。

「瀟湘八景図」の創始は中国北宋時代の文人画家で官員であった宋迪（生没年不詳）とされ、沈括（1031–1095）の『夢渓筆談』には 8 つの景観を宋迪が描いたと記されている。

山雪の「瀟湘八景図屏風」については、第 1 扇から第 8 扇の間に明らかな筆様の違いが見てとれることを踏まえながら、1 扇ごとの図様を分析した。玉澗、牧谿、夏珪、梁楷、安堅といった中国、朝鮮の複数の筆様が取り入れられ、向かい合った 2 扇についてもこれらの様式が完全には一致せず、「瀟湘八景図」における一連の流れに統一性が見られないことが分かった。特に「江天暮雪」、「漁村夕照」、「煙寺晩鐘」には山雪以外の瀟湘八景図にはあまり見られないモチーフと構図が表現されている。これらが中国や朝鮮といった幅広い地域の作品を参考に制作されていること、加えてそれらの中には瀟湘地域やモチーフが持つ「左遷」や「隠棲」といったイメージが含まれていると考察した。そして、このような様式の違いは山雪が「瀟湘八景図」を創始した宋迪を含め、様々な瀟湘八景図のイメージを含めた記念碑的な作品を制作しようとしたのではないかと推察した。

また、山雪の「瀟湘八景図屏風」および「花卉流水図」が制作当初から表裏として構成されたのかは明らかとなっていないが、山雪と深く交流のあった林羅山やその息子の林鵞峰（1618–1680）は徳川幕府の儒者として仕えた人物であり、こうした知識階級の上層の人々が本図に関係していると考えられる点、さらに連歌と水墨山水画の関わりと山雪の作品が和歌の題材として公家たちに詠まれていることから、本図が特別な注文の下で制作された作品であった可能性を指摘できる。

第 2 章　宋迪「瀟湘八景図」および山雪の「花卉流水図屏風」について

表面「瀟湘八景図屏風」の各扇の様式に複数の絵師の影響があることを踏まえ、その創始にあたる宋迪についてはどの程度理解されていたのか、さらに本図が制作された桃山、江戸時代では宋迪が日本においてどのように受容されていたのかについて論じた。

中国において宋迪は存命中からすでにその巧みな画技において名前が記録され、『図絵宝鑑』や『宣和画譜』にその跡を見ることができる他、中国国内では宋迪の「瀟湘八景図」を土台とした作品が制作された記録もあり、宋迪と瀟湘八景図が広く理解されていたことが分かった。

日本国内における宋迪及び「瀟湘八景図」創始の理解に関しては、上記の『図絵宝鑑』や『宣和画譜』、さらに宋迪の「瀟湘八景図」創始を最も早くに記載したと考えられる『夢渓筆談』といった書物が室町時代頃にはすでに日本に舶載されて流通しており、山雪が宋迪の「瀟湘八景図」創始について理解していた可能性を示した。

第 2 節では裏面「花卉流水図屏風」下半分に描かれた 144 種類の植物について同定を行った。

桜や梅、菊など品種の違いや特徴の類似する植物の描き分けは非常に巧みであり、こうした細部の表現や品種の描き分けは博物図譜に通じる重要性を見ることができる。また、植物の中には観賞用の花だけでなく薬草類が含まれていることから、『独楽園記』の採薬圃に澆花亭のイメージを追加したという指摘に通じると考え、山雪が司馬光の『独楽園記』を学習し、本図に反映させたのではないかとした。

図 1　狩野山雪「瀟湘八景図屏風」
東京国立博物館蔵

図 2　狩野山雪「花卉流水図屏風」
東京国立博物館蔵

第 3 章　「瀟湘八景図屏風」及び「花卉流水図屏風」の寓意

3 章では本図の主題の背景として、北宋の司馬光と蘇軾、宋迪の 3 人の交流があると仮説し、検証した。また、この 3 名の事蹟が 17 世紀前半の日本においてどのよう受容されていたのか論じた。加えて、「瀟湘八景図」と「花卉流水図屏風」が表裏で構成された理由について考察した。

司馬光と蘇軾は同じ旧法党に身を置いていた他、司馬光の洛陽での生活ぶりに関して蘇軾が言及するなど、頻繁に交流があったことがうかがえる。また、『温國文正公文集』には熙寧 8 年（1075）から元豊元年（1078）までの 3 年間における司馬光と宋迪の交流を書いた詩が収められ、司馬光と宋迪が親交をもった可能性があることが分かった。さらに、宋迪が描き、蘇軾が賛をした「瀟湘晩景図」が司馬光の交友の場でやり取りされていた可能性がある。

旧法党に属し、新法の改革によって首都開封を追われた司馬光と蘇軾、部下の不始末によって免職した宋迪という奇しくも同じ状況に置かれた 3 人は、司馬光が洛陽に造園した「独楽園」を軸として結びつけることができると考える。3 人は司馬光の「独楽園」を中心として交流や作品制作を行ったのではないか。

現時点で宋迪が司馬光の独楽園を訪ねた記録は見つけられていないが、詩や洛陽での司馬光と宋迪の動向を踏まえると、宋迪が独楽園を訪問した可能性は十分あったのではないかと考える。

そして、こうした交流を記録した書物の中には室町時代に五山禅僧たちが多大な関心を寄せた蘇軾の詩集などが含まれている他、山雪と同時期に刊行された司馬光に関する文集があったことから、山雪が 3 人の交流に関する書物に目を通すことができたのではないかと考察した。

おわりに

以上を踏まえ、本論では「瀟湘八景図屏風」と「花卉流水図屏風」が表裏で構成された典拠として洛陽の「独楽園」を軸とした司馬光、蘇軾、宋迪 3 人の交流とそれに関するテキストがあり、その制作意図の中には瀟湘地域における左遷や棲隠、すなわち司馬光、蘇軾、宋迪の政治的な不遇における精神といった寓意が含まれているのではないかと考察する。そして、そのような寓意は本図が複数の様式を用いて描かれていることだけでなく、「瀟湘八景図」と「花卉流水図」が組み合わされた複雑なかたちを成すことに繋がったのではないだろうか。

本図を制作するにあたって複数の作品及び書籍に関する知識が必須であり、裏面「花卉流水図屏風」の享受者が山雪周辺の知識層であったと推察されているように、やはり山雪単独の制作ではなく、山雪周辺の熙寧年間における司馬光・蘇軾・宋迪の交流とそれを知り得た知識人達が制作に携わっていると考えられるだろう。

［図版典拠：図 1、2「国立文化財機構所蔵品統合検索システム」（https://colbase.nich.go.jp/collection_items/tnm/A-12089?locale=ja）を加工して作成］